

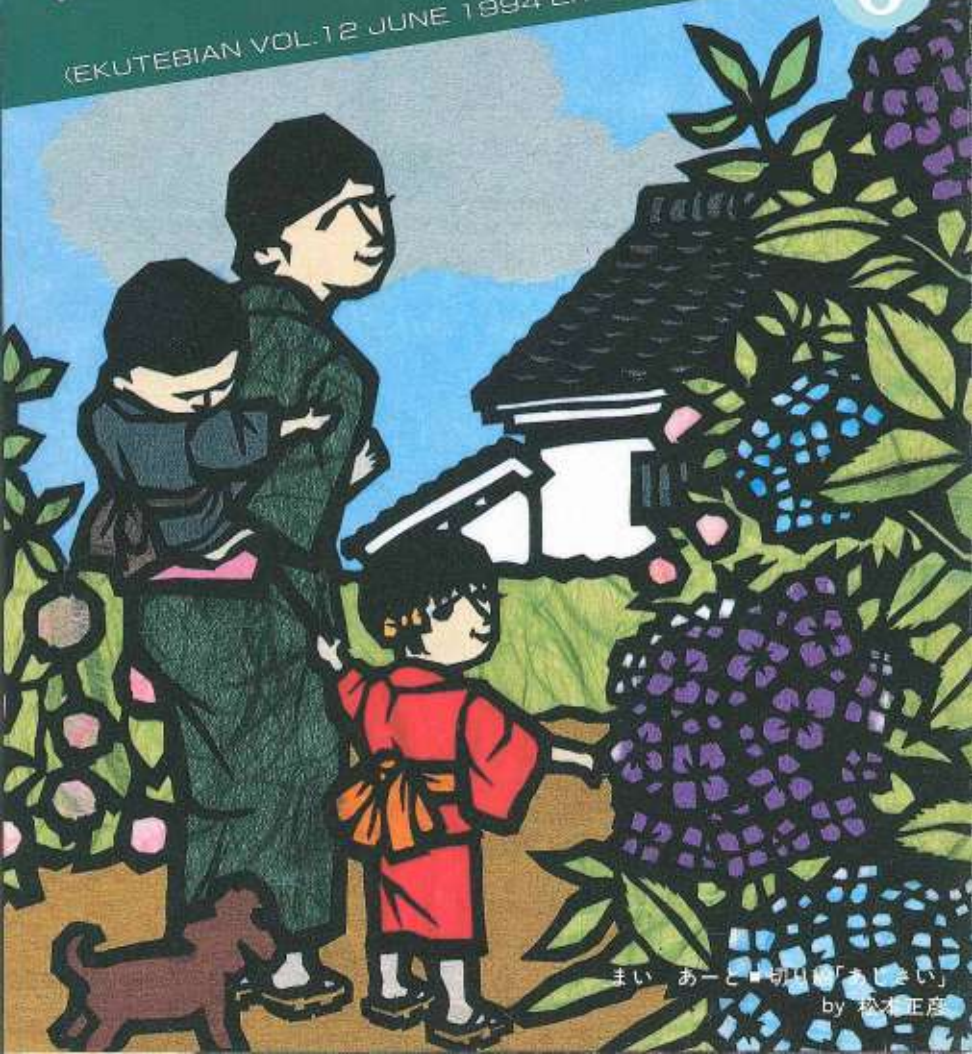
月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

6

(EKUTEBIAN VOL.12 JUNE 1994 EKUTEBIAN)



まい あーじ 立川「まじまい」
by 松本正彦



高松町三丁目に本店を構えるのは和菓子司立川伊勢屋。創業者の小林信司さんによれば、和菓子の味は「何といってもあんこで決まる」原料の小豆が、輸

入物増加の一途をたどる現在。「和菓子ではなくなる」からと、小林さんは、国内でも北海道産の小豆しか使わない。もちろん、小豆を煮るところから始めてすべて手作りである。しかも、お菓子によってあんの作り方も変える職人気質。

ご覧の上生菓子、左奥が花のつぼみと青豆が透けて見える金玉糖、右がバラを型取った練り切り。そして、中央が「紫陽花」。白あんの周囲には、一つ一つ細やかに刻まれた寒天がちりばめられている。まるで滴る雨の雫が、陽光を浴びたようにきらめいているのは、まさしく「紫陽花」の趣きだ。

撮影：井上義治



おいしい、いっぱい。

お茶の小室園

立川市柴崎町2-4-8 TEL. 22-2894

小林信司の 紫陽花(上生菓子)



あそこに見えるあのお蔵

【五日市街道編】

只今は、十四代、十五代目。古風で趣の深い家がズラリ並ぶ、この立川五日市街道。砂川一番から十番へと左右を見回せば、あちこちで見えるお蔵。
百二十から百五十年も昔、江戸時代からの物もある。
お蔵の扉は、下の方についている鍵穴にサルという、巾のような物を差し込んで開ける。合言葉は、サルを左へ回せば、歴史が開く。

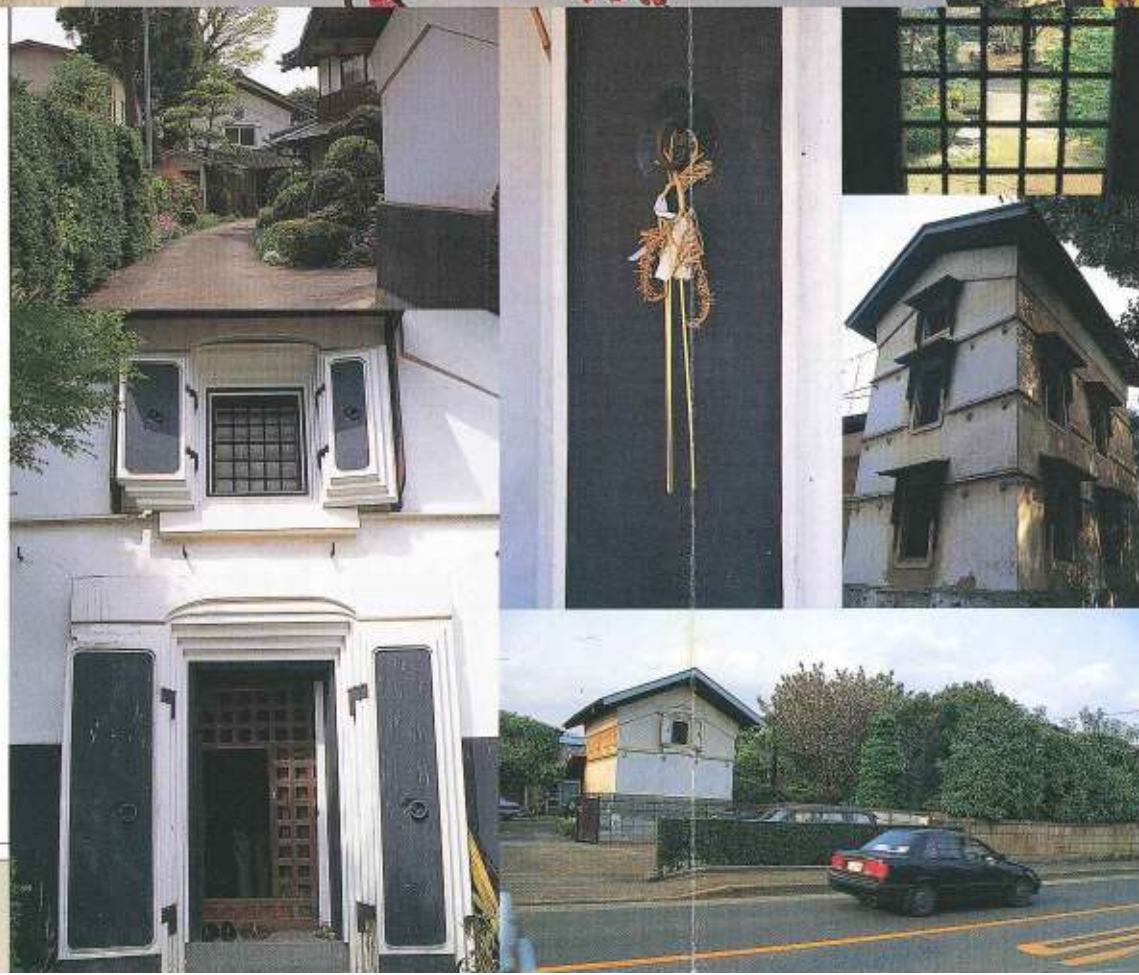
撮影・須崎 勇(幸町)



昔、寺小屋を営んでいた家のお蔵からは、新築後、近藤修身の血判入りの古文書も、住所を見ると「神奈川県多摩郡」。百年以上前のことがわかる。



道沿いのあちこちでいろいろなお蔵を見つけたのも小さな歴史を発見できるが、お蔵の窓から現代を眺めるのも、また面白い。





団地街の真中に三角形の公園が…



仲田靖次の

AT PARKS…

心地よい風。木もれ日。子供たちの遊び声。今年は公園と話そう。

第6回 富士見町団地さんかく公園

手入れは細かくやっている。一面に広がる花壇はそう語っていた。雨上がりを待っていたように滴の残る草の上を子供たちは、はしゃぎまわる。



夕方の陽光の中でゲームは続く

色とりどりの花壇がある